稲山会 通信

第 47 号

2023 年 7 月 1 日発行

発行人:行方正幸　発行所:稲門山の会代表　TEL: 043-486-0239　MAIL: yukuemnamekata@gmail.com ©稲門山の会1998

2023 年稲門山の会総会・新年会特集

挨拶する行方代表

Ⅰ　2023 年総会の概要

採　決

2023年2月5日(日)13：30～15：000に、内幸町の航空会館で常数英昭副代表の司会で2023年総会を開催しました。出席者は稲門山の会会員40人及び早大山の会13人で、総会の概要は次の通りです。

こんにちは。あけましておめでとうございます。代表の行方正幸です。お忙しい中、稲門山の会２０２３年総会・新年会にご参集いただきありがとうございます。

新型コロナウイルス感染という未曽有の大惨事の中で、この３年間、私どもは総会、新年会を自粛してきました。が、心配していたコロナの感染も次第に落ち着いてきたので、３年ぶりに総会を開催することにしました。

私の初めての対面の総会になります、感無量です。この３年間で、日本社会も、山の世界も、早稲田大学を巡る環境も、大きく変わってしまいました。この間、亡くなられたり、ＯＢ会を脱退した方も多く、会員数が約一割も減少しました。

しかし、このような逆風の中を一昨年、昨年と、ＯＢ・現役とも槍穂高の大キレット目指すなど、活発な登山が行なわれたことに敬意を表したいと思います。

次に、お知らせですが、名達ＯＢには引き続き事務局長をやっていただきますが、諸般の事情で　皆様方の連絡先は当面、私の自宅(〒285-0807　千葉県佐倉市山王２丁目３９番地３)となります。よろしくお願いします。

⑴　議案の採択

名達事務局長からハガキによる賛成は５２通あったと報告があり、司会者から第１号議案、第２号議案、第３号議案について挙手で採択が行われた。その結果、出席者全員が賛成となり、総会の賛否の合計は賛成９２となり、議案は成立いたししました。

⑵【第１号議案　２０２２年の事業報告】

コロナの感染拡大を防止するため、早稲田大学からの要請を受けて、２２年の総会はオンライン開催とし、新年会も中止しました。

このような中、昨年の春頃から次第にコロナとのつき合い方が変わってきました。学生の会では、昨年は２４人もの新人が加入するなど、大学におけるサークル活動が再開されました。夏合宿についても、８月に瑞牆山・金峰山、９月に尾瀬と２パーティーが出ました。個人山行も春山、残雪期、沢登りと、年間を通して活発な登山活動が行われ、2019年、2020年と続いた遭難の後遺症からほぼ脱却することができました。

ＯＢ会については、２２年前半は会報の発行、オンライン通信、Zoomによるコーチ会の開催と非対面型の活動に傾注してきました。特に会報には宮野ＯＢや金子ＯＢなどから活発な投稿や連載していただき、充実したものとなりました。

１０月に入ると(ＮＰＯ法人)千露里庵の協力を得て、ＯＢと学生との合同研修を八ヶ岳で開催、ＯＢ会も「With Corona」に舵を切りました。千露里庵研修会では吉田稔ＯＢにご尽力いただき感謝しています。

さて、当会の2023年の計画ですが、コロナの先行きはまだ不透明な部分もあるが、ＯＢと学生との合同研修会、ＯＢ間の交流イベントをしたいと思います。具体的には、

① 春か秋に八ヶ岳の千露里庵でＯＢ・学生の合同研修会を開催します。

② 次に、初夏に昨年、上高地の中の湯で開催した百名山の会のような、温泉と登山を組わ合わせたイベントを谷川岳（一ノ倉沢）でやろうと考えております。昨年、中の湯でご尽力いただいた笠原ＯＢに是非、今回も協力お願いしたいと思います。

③ 三つ目は暑気払いとして、早稲田にある大隈重信別邸の「完之荘」で本格的日本料理を堪能する会を開催したいと思います。

早大山の会の遭難・コロナの影響からの脱却。稲門山の会の長年の課題であった執行部の若返り。そして、高齢化・会員減少からの財務体質の強化にほぼ目処が付きましたので、2023年は現役学生には安全で楽しい登山活動ができるよう、またＯＢには高齢化等に沿った楽しみを還元できるようにして参りますので、ご支援の程よろしくお願い申し上げます。

⑶【第３号議案　２０２３年の新旧役員の変更（案)】

【退任役員】	【新任役員等】
松村幹雄ＯＢ	村田宣男ＯＢが副代表に昇任
後藤洋一郎ＯＢ	〔新任〕米山不器ＯＢ
山本達之ＯＢ	〔新任〕天野智彦ＯＢ
	〔新任〕岡田瑞紀ＯＢ

ネパールのシェルパ族の支援を呼びかける

打矢ＯＢ(S38年卒)と笠原ＯＢ(S40年卒)

聞き入る会場

⑷【第２号議案　２０２２年会計監事報告】

柴原会計担当役員

２月24日現在、会費の納入者は94人386,000円で、2018年のコロナ感染前に比べると約30人減っております。会員の高齢化、遭難、コロナの感染拡大により３年前に比べて、訃報や退会で会員数が一割以上減ったことが要因と思われます。会費は山の会活動の根幹であり、稲門山の会の活動資金も減少傾向にあるため、2024年から会費を4000円から5000円に引き上げたいと思いますので、ご理解とご協力をお願いいたします。

【ゆうちょ銀行内の振替…振込口座番号：00100 - 2 - 333067：稲門山の会】

【他行からの振込……ゆうちょ銀行＋018＋普通預金5130715：稲門山の会】

2022年度会計報告(2022年1月1日～12月31日)

稲門山の会
単位:円

項目	収入	支出	残高	備考欄	
前期からの繰越額			3,293,493		
年会費(振込分)	346,000			4,000円×84人、10,000×1人	
年会費(新年会時入金)	0			新年会不開催	
事務局経費精算　戻し金	13,133				
預金受取利息	26				
収入合計	359,159				
ZOOM使用料		18,860		役員会等に使用	
稲山会通信44号、45号		148,501		印刷費、発送費	
会議費		54,960		役員会、コーチ会(計5回)	
振込手数料		3,225			
ホームページ管理料		43,740			
パソコン代		79,600		ホームページ用	
現役テント購入代補助金		100,000		仮払い(2張購入予定)	
OB現役キャンプ助成金		20,000		チロリ庵10/1, 10/2	
郵便振替用紙作成料金		970			
支出合計		469,856			
収支合計	359,159	469,856	-110,697		
項目別預金残高内訳書					
ゆうちょ銀行			80,105	通帳残高額を確認済	①
年会費入金振替郵便口座			128,297	通帳残高額を確認済	②
みずほ銀行普通預金口座			1,115,787	通帳残高額を確認済	③
積立金(ゆうちょ銀行定期預金)			843,000	通帳残高額を確認済	④
遭難対策費(みずほ銀行定期預金)			1,015,607	通帳残高額を確認済	⑤
合計			3,182,796		

上記の会計報告を致します。

会計幹事　柴原至

(代表が銀行通帳残高書と照合確認済み)

⑸　旧新役員の交代

① 松村幹雄 OB(S48 年卒)

松村ＯＢには１０年間もの長きにわたって役員会に在籍し、春や秋のハイキングなどの企画、実行を担当していただきました。その他にも「稲門山の会 60 周年記念行事」などにも中心となって推進していただき、ありがとうございます。

② 後藤洋一郎 OB(S49 年卒)

後藤ＯＢにはコーチ会で現役学生に懇切丁寧な指導していただき、学生に好評でした。コロナ前の北八ヶ岳天狗岳で雪上トレーニングなど、学生との合同登山などにも精力的な指導に感謝しております。

③ 村田宣男新副代表(S52 年卒)

村田ＯＢが副代表となって、彼が中心となってこれからの学生の指導を行います。WMＳ少数精鋭時代の最強リーダーで、現在も年間 50 日の山行を行っている現役の登山家です。

④ 米山不器 OB(S54 年卒)

そして、米山ＯＢには、彼の優れた企画力とリーダーシップで、今後の稲門山の会の活動が大きく変わっていくことを期待しています。ジムで身体を絞り復活と頼もしい挨拶がありました。ガンバ。ガンバ。

⑤ 岡田瑞紀 OB(R3 年卒)

若手で現役クライマーの岡田瑞紀ＯＢもコーチ会に参加し、後輩の指導にあたってくれることになりました。社会人の経験と最新登山技術を学生にどのように伝授してくれるのか、とても楽しみです。

⑥ 天野智彦 OB(H４年卒)

ＰＳ．今回の議案には間合いませんでしたが、天野ＯＢにもコーチ会担当役員をお願いしました。天野ＯＢは学生時代に、ヒマラヤ、欧州、アフリカ、南米など、ひとりで世界の山々に挑戦した冒険家です。彼の海外登山の経験と幅広い視野に期待しています。

⑹　特別講演会　元川里美氏

2023 年の総会はネイチャーガイドで、自然保護活動家の元川里美さんをお迎えして「上高地と穂高連峰の自然」というテーマで講演していただきました。今回は、上高地に出現する、ニホンザル、ツキノワグマ、オコジョなどの野生動物に加え、鳥、チョウなどの昆虫などの動物に焦点を絞って、楽しい動物たちの生態や自然保護の大切さを講演していただきました。

本人曰く、屋内における講演よりも上高地などの自然の中で自然や生き物について案内する方が好きということなので、改めて上高地などの自然の中でガイドをお願いしたいと思っています。

◆　なお、元川さんは 2019 年 8 月に起きた、当会高野啓介ＯＢ(S51 年卒)の上高地、明神岳の遭難の時に日本山岳会山岳研究所の管理人をされており、高野ＯＢの捜索や収容作業のときに多大なご尽力をいただきました。改めて御礼申し上げます。

以上：行方正幸(S50 卒)記

Ⅲ　2023 新年会の皆さん（敬称略）

開会の挨拶をする上田訓央 OB(S33 卒)

乾杯の発声は宮野準治 OB(S35 卒)

乾杯

吉田　宇野澤　山崎　竹内

清水　関根

宮野　加納　常数　清水

斉藤　加納

田野辺　宇野澤

田野辺　宇野澤　　打矢

長谷川　　加納

学生だよ全員集合！！：新井、海崎、羽山、木村、齋藤、櫛舎、小田、佐藤、松本、谷口、藤原、井上

本田　　伊藤　　西山　　早川　井上

加賀谷　　常数

新井　　清水　　狩野

新井(後頭)　松村(幹)　　天野　狩野(後頭)

柴原　　三宅　　角田　　村田

斎藤 岡田　　後藤 金子 鈴木 海崎

関根 笠原 宮野夫妻 元川 金子　鈴木

小田　　鹿間

清水　　関根　吉田　山崎

松村(啓)　　小田

海崎

櫛舎

羽山

宮野夫妻

本田　　山路　　井上

鈴木　岡田 海崎 藤原 行方 谷口 天野

宇野澤　清水　　山本

清水　打矢　長谷川 笠原　　田野辺　山崎　竹内　加納

三宅辰幸 OB(S53 卒)の指揮で「都の西北」斉唱

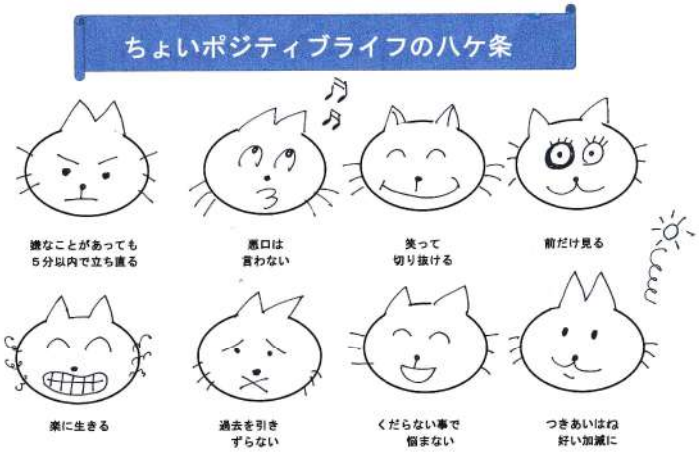
〆の挨拶をする斎藤雄二 OB(S41 卒)

⑵ 会員近況報告 ～ 2022 年総会の「返信はがき」より～

◆清水正昭（Ｓ33） 終活の一環として山の写真整理を始めましたが、懐かしさと思い出が交錯して遅々として進まず、断捨離の難しさを痛感しています◆大国恒雄（Ｓ33）元川様によろしくお伝えください ◆上田訓央（Ｓ33） お役目ご苦労様です。外に出るのがまず無くなりました。こんどの新年会がこの一年会で最初の外出です。◆宮野準治（Ｓ35） ＯＢ脱退という現実にどう対応していくのか皆で考えてみたい。2021 年の爺岳登山で北アルプス大学を卒業したが、やはり静まらず、2022 年には友人夫妻と嘉門次小屋まで行き、岩魚の塩焼きと骨酒を嗜み、穂高連峰に思いを重ね、ウエストンのピッケルを撫でてきました（今年は涸沢カールと思っています。これ卒業違反ではないですよネ） ◆上田敦子（Ｓ34）増々充実した内容の稲山会通信を楽しみに拝読しています。特に廣瀬さん、金子さんの「ＣＯＬＵＭＮ」は興味深く、次号も期待しております ◆新川浩司（Ｓ36） 皆様にお会いしたいが、体力の限界で叶わず残念◆廣瀬舜一（Ｓ38） 生れてこの方７回目の 年男，寅年となり少し体力が落ちています。その代わりに久住高原の原野を思い切り馬で乗り 回し人生を満喫しています。 ◆清水保宏（Ｓ36） 南アメリカに 10 年程前に行った。ベネズエラ、チリ、アルゼンチンにはまた行きたい◆山本貴次（Ｓ36） 85 歳になりますが日々元気に過ごしております。◆荒川秀夫（Ｓ36） 何とか元気を保っています◆加納孝治（Ｓ37） 役員諸兄ご苦労様です。稲山会通信楽しみにしています。又現役諸君の活動も頼もしい限りです。無事を願っております。体調を整え、総会に出席するのを楽しみにしています◆滝沢信一（Ｓ36）久しぶりに出席したいのですが 2 月上旬はいつも豪雪中で、上京できません。残念です。皆さんによろしく ◆高尾勝彦（Ｓ37）体力の衰えを感じそろそろ終活と感じています。頸椎の手術後、手、指のしびれがひどく、読みにくい字でスミマセン◆恩田和夫（Ｓ37）脊柱管狭窄症とやらで、頑固な腰痛に閉口しています。コロナへの感染も怖いので“巣ごもり老人”を決め込んでいます。想定外だった八十路も、早や半ばを過ぎました。お山に向き合うには、豊かな思い出の世界に浸るしかありません◆金子弘吉（Ｓ37） 金子治雄氏のコラムで何故か木暮が小暮になっていたのが稲山会岳人としては非常に残念◆鈴木健夫（Ｓ37）約 3 年コロナの為、スポーツジムに行けないので体力が落ちていると思われます ◆竹内敏（Ｓ38） 元気ですが、腰がチョットだめか、出席します。よろしく◆村田進（Ｓ37）2021 年に、人生 2 回目の胃と十二指腸の手術をして、削除したのでその後はおとなしくしています ◆打矢之威（Ｓ37）ネパールのシェルパ支援の活動をしています。稲山会会員の御協力を 得たいので近々状況の詳細をお送りします。よろしくお願いします◆ 古林美穂子（Ｓ38）お陰様で元気に暮らしています◆栗又功雄（Ｓ38） 今、入院しています。新年会欠席します ◆松村啓之亮（Ｓ38）今やＴＶで「日本百低山」を羨望の眼で観ています◆白倉俊夫（Ｓ38）水彩スケッチ会、民謡会など地元中心

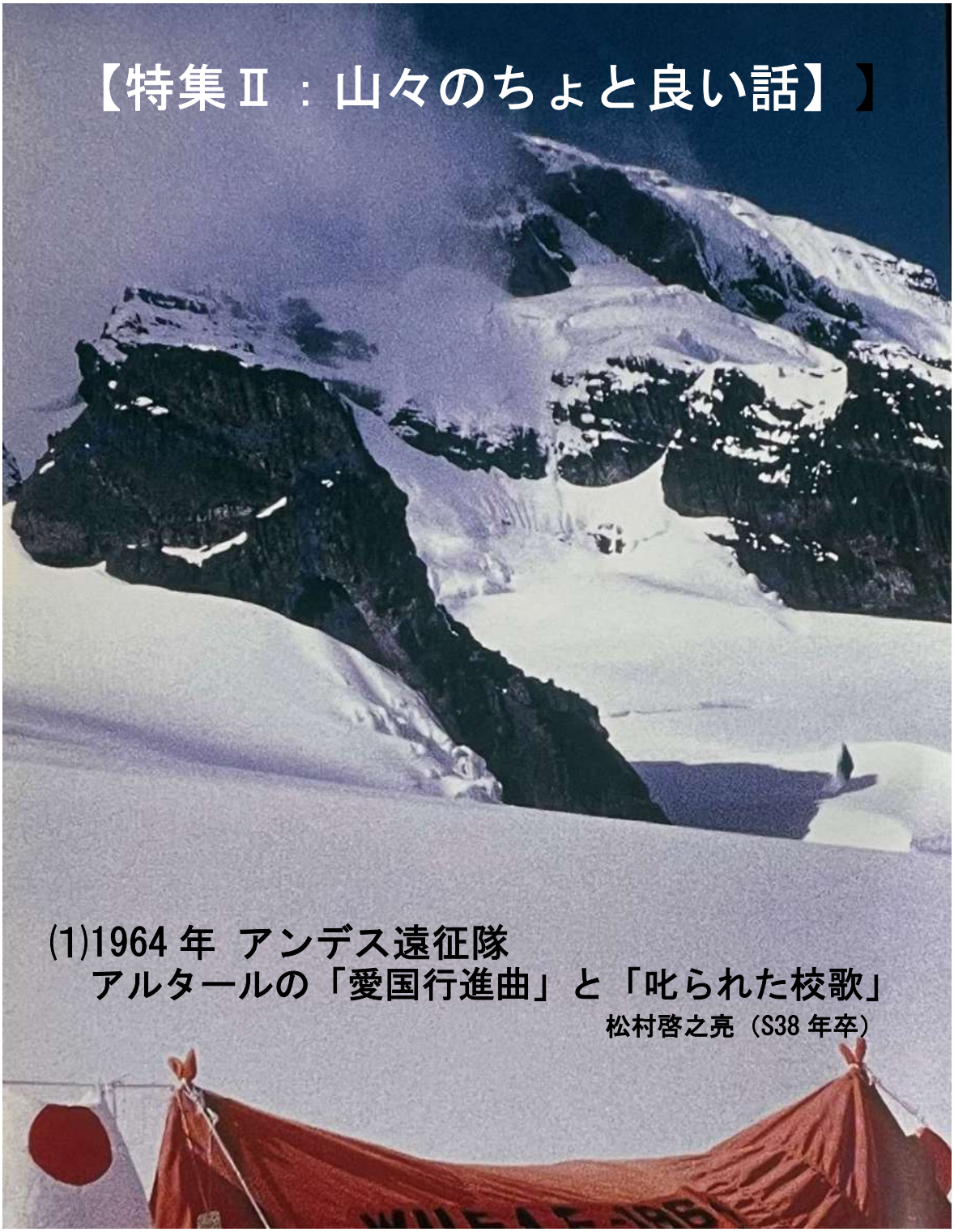
に楽しんでおります　◆吉田稔（Ｓ38）千露里庵◆秤勤（Ｓ39）元気！日曜はパンさき礼拝の為、毎週教会 ◆鈴木明人（Ｓ40）スキー行きを楽しんでおります◆田野辺親遠（Ｓ40）10年来通ってきましたオーストリアチロルの山々も三年間ご無沙汰。今年は行こうかと思っていますが……◆笠原豈（Ｓ40）日本百高山の南真砂岳を狙いたく、呼吸筋などの体力維持に努めたいです◆山崎征彦（Ｓ40）取り合えずコロナ禍をかいくぐって生き延びています。目黒区シルバー人材センターの就業(3種)も5年経過し、ＴＶの「百名山」を見て60年前の雄姿？を偲んでいます◆長谷川徹（Ｓ40）脊柱管狭窄症で山行自粛中◆斉藤雄二（Ｓ41）大腿骨頸部骨折から間もなく3年です。生活に問題はありませんが、人工骨頭入っていますので、完全に戻ることはないようです。プールでリハビリが日課です ◆金子治雄（Ｓ41）役員の皆様ご苦労様です。学生の皆さんの活発な活動も頼もしく、自分が元気になるように感じます ◆渡辺征二（Ｓ42）寄る年のせいか、昨年は体調不良に悩まされました。同期もだんだん減ってきてさびしいです。昨年末久富君の逝去を奥さんから知り残念です。新年会で若い現役生に会って若さを取り戻したいです◆高岡勝（Ｓ42）昨年、踵の神経の手術、リハビリでウオーキングできるようになりました◆佐久間正昭（Ｓ43）いつも充実した稲山会通信を作って頂き、ありがとうございます。21年3月より始めた夫婦二人での区切り打ち、四国88か所1100kmの歩き遍路を。妻の頑張りもあり、22年9月に結願(けちがん)しました。コロナ禍の2年でしたが、無事歩けたことに感謝です。高野さんの事故の際お世話になった山研の元川さん、お話し聞きたかったです。◆太郎良博（Ｓ43）＜うさ公の速足・駆け足何のその　ゆっくり確かに歩む山道＞を念頭に、今年も年間20日を目標に山を登るつもりです。昨年の夏に豪雨で登れなかった山形の朝日連峰に是非行きたいと思っています。◆丹治和男（Ｓ44）老夫婦はコロナを避けていますが、子供の家庭で陽性が出始めており、欠席いたします。◆島田弘康（Ｓ46）後期高齢者になり、医療機関にお世話になっておりますが、とりあえず元気です。コロナ禍のためダ イビングは3年間していませんが、軽いハイキングは細々と続けています。早く以前のプな活動がしたいものです◆新井昭夫（Ｓ46）立派な通信が楽しみです。月1回はＬａＳportivaの登山靴に親しんでハイキングをしています◆福田榮一（Ｓ46）右膝を痛めてリハビリ中です◆神谷哲郎（Ｓ49）山ははるか昔のことになりましたが、小生の様な不良会員にも毎回会報を送付いただき感謝しております。71歳になりましたが、2011年から就職した米国企業にまだフルタイムで勤務しております◆鈴木良一（Ｓ49）22年は屋久島宮之浦岳(4月)、大分九重連山(6月)、山形鳥海山(8月)に登りました◆後藤洋一郎（Ｓ49）3～5回/月登山を続けています◆小竹正雄（Ｓ50）昨年、10月中旬北八ヶ岳(白駒池～黒百合ヒュッテ(泊)～天狗岳往復)に山行、秋山を満喫しました。森林の中の穏やかな山歩き（新人合宿の稲子湯～黒百合平～赤岳～小淵沢に２回山行）の記憶が強く刻ま

れていましたが、思いのほか急登や岩石があり、老齢の身を痛感した次第です◆行方正幸（Ｓ50）３年振りに成人病検診の健康診断を受けたら、墜落事故で身長が 171 ㎝から 163 ㎝に縮んでしまいました。脊椎、腰椎、体中の関節が潰れても、普通に歩くことが出来るのは先祖様の行いが良かったのか、それとも登山で培った体力・精神力のお陰かなぁ～。いまは現役学生の皆さんの成長が楽しみです。◆石原順三（Ｓ51） 四国八十八 ヶ所のお遍路を終え、百名城巡りをしています。現在 49 城です。◆倉川秀明（Ｓ52）総会・新年会は残念ながら親戚（姪）の結婚式出席（岩手県盛岡）のため欠席します。私は極めて元気で、仕事も市民活動も続けています。孫たちの世話にも忙殺されています◆岡安喜久夫（Ｓ51） いろいろ会報お送りいただきありがとうございます。楽しんで読ませていただいております。現在療養中で中々出歩けない状況です◆調昭雄（Ｓ51）●灸院開業５年目となりました。「健忘」対策の●灸もしています◆狩野雅（Ｓ52） 秋は鮎釣り、冬はゲレンデと山スキー、適度に楽しんでいます ◆角田清隆（Ｓ52）体調はまずまずです◆元気です。一昨年、原因不明の筋肉痛・関節痛に悩まされ、その後間●性●行のため長い間歩くことが出来なくなりました。今はビリヤード場にリハビリをしています◆米山不器（Ｓ54）力不足ですが役員がんばります◆伊藤渉 （Ｓ54）丹藤、高野さんに会いたかった。たまに年会に出て皆さんにお会いしないといけない◆早川明利（Ｓ54）出席します。皆さんとの再会楽しみにしています◆山路淳（Ｓ54）山のテレビ、雑誌、会報など楽しみ、元気にしています◆徳永義孝（Ｓ54）いつもご連絡ありがとうございます。山の会の皆様にお会いしたいのですが、コロナがもう少し落ち着いてからにさせてください◆西山透（Ｓ57）昨年７月には、40 年余りの会社人生にピリオドを打ち、人生の第３ステージをスタートする予定です◆里方昭彦（Ｓ58）役員の皆様、大変ご苦労様です。60 歳を過ぎてもエンジニアとして忙しく働かせてもらっています。



2023 年役員

代　表：行方正幸 （S50 卒）
副代表：常数英昭 （S49 卒）
副代表：村田宣男 （S52 卒）
事務局長：名達一彦 S(51 卒)
幹　事：柴原　　至 （S52 卒）
〃　　鹿間行喜 （S52 卒）
〃　　三宅辰幸 （S52 卒）
〃　　米山不器 （S54 卒）
〃　　天野智彦 （ H4 卒）
〃　　厚木紗里 （ R1 卒）
〃　　岡田瑞紀 （ R3 卒）



【特集Ⅱ：山々のちょと良い話】】

(1)1964 年 アンデス遠征隊
アルタールの「愛国行進曲」と「叱られた校歌」

松村啓之亮（S38 年卒）

些か妙なタイトルとスタイルで拙文を寄稿するのには少々の訳が。

即ち、ＯＢ会代表でこの会報の編集長である行方さんは、日頃原稿集めに苦慮するあまり、小生が地元の稲門会誌に載せた小文『校歌を叱られる』を目にして同様のものをここに書くべしとのご下命。そして更に元文章の倍程度の長さにせよとのこと。

もうアルタール登山のことは語られ書き尽くされたことだしと固辞したものの受け入れられることは無く、学生時代に鍛えた論文試験の要領で、少しの知識を反復水増しして長文の解答らしきものに仕立てる術を駆使して以下を記します。

『愛国行進曲』

1964 年６月 28 日のオビスポ峰登頂成功に先立つ６月 10 日、前々日に角田さん・青木・小林がＡＣより上のルートを切り開いてくれた後をうけて、早川さんとアタックに向かう。

しかし結局カニのハサミと呼んだクロアールを詰めて、頂上に続く右手の岩壁に取りつくものの直下の 50 メートルが越えられず敗退。

諦めて下山を決意した頃には日も傾いて体力も尽き、難所では常にトップを登り疲れ知らずだった早川さんも、下降最初の１ピッチで氷雪の急斜面を 30 メートルは滑落するほど。

登りに苦し紛れに打っておいた側壁へのハーケンは半分程度しか利いておらずよく確保の支点になったものと胸をなでおろす。

我々をサポートするため村田さんとＡＣ入りして双眼鏡で覗いていた隊長の宮野さんからは「懸垂で下っているようだが登頂できたのか？」と無線で意外な質問が。

「皮肉で言ってるんじゃないよな」と囁き交わしながら安全な場所があれば無理な下山を避けてビバークすることを伝える。

クロアール下部まで下り急斜面の雪を均しザックに腰を下ろしツエルトを被る。

残り物の食料を腹に詰めて眠る態勢に入る。

何時間か熟睡した頃に思わぬ騒音で目が覚める。ぼんやりした意識で心耳をすますと『見よ東海の空明けて旭日高く輝けば天地の正気溌剌と……』まさか此処での驚愕の歌声。寒さで寝付けぬ早川さんががなる「愛国行進曲」。

この文章を読む後輩諸君のために付記しておくと戦前に国民的愛唱歌として作られた曲。難解な漢字が頻出する曲を歌い終えた信州佐久育ちで美声のザイルのトップは心身の高揚が幸いしたか眠りに入る。

しかし狭いツエルトの中の耳元で拝聴するには些か不適で、もちろんここアンデスの旭日には未だ時間があり過ぎるが寒さもあって小生再び眠りに戻るのは無理である。

ツエルトの外はうっとりするような星月夜で思いもかけぬ大きさで南十字星が目の前に輝いている。

やむなくヘッドランプの明かりを頼りにノートに「よしなしごと」を書きつらねひたすら時間の過ぎるのを待つ。

この時のメモはアルタール下山後、次の目的地カヤンベ峰に向かう途中で日本にいる友人に便りとして送る。

この「宛先」が後に「わが妻」になるとは思ってもみない頃のことであるが。

そしてこの日を境にこの地域を襲った異常気象で 10 日以上も降雪が続きＡＣとＣ１を放棄して全員ＢＣに下る。

昼夜雪崩の轟音が響く日々をひたすら耐えて迎えた 1964 年６月 28 日に話は移る。

この小文は前述の如く小生の地元の稲門会誌からの転載であるが固有名詞を改め、煩瑣な遠征の前書きを省略したものは以下です：

『校歌を叱られる』

大量の湿雪と雪崩で様相が一変してしまったＣ１から上部では、最後のチャンスと覚悟したこの日は珍しい快晴。

登攀隊の角田・早川両先輩をサポートするために我々は午後にのんびりとＣ１からＡＣに入る。その直後アタック隊とＢＣの宮野隊長との切れ切れの無線通信を通じて登頂が成功したことを知る。

先輩２人のＡＣへの凱旋に困難は無いだろうと戦勝ムードでいたが, やがて日没そして激しい風雪でかなり危険なものになる。

暗夜の風雪の中で下降点を間違う恐れがあり、小林はテントに残り青木と２人で難所である氷雪のタワラのルンゼ下部まで迎えに行くことにしてザイルを組む。

頭上に近づいたライトを見ながら突然青木が「校歌を歌って出迎えようか」と言い出す。

普段あまり冗談も言わぬ真面目男の場違いな提案を無下に断ることも出来ず同意する。
しかし「俺、歌詞をよく間違えるので、松村頼むよ」と無責任ぶり。

軽い表層雪崩と共に近くまで下ってきた先輩二人は、早暁から 15 時間に及ぶ奮闘で疲労困憊。薄い酸素と強風に抗する我々の美声も校歌の出だしとは聞こえないようで、「何を言ってるんだライトでルートの指示をしろ」と思わぬ叱声怒声で終了。

この時氷河の上にいた４人のうち３人は既にこの世を去ってしまった。

思えばこれは私の青春期終盤の少々滑稽な思い出の校歌（の出だし）になるのだろう。
その後も八〇余歳の今日まで冠婚葬祭の折々に何度校歌や応援歌を歌い聞いたことだろう。
歌謡曲や唱歌は口ずさみ耳にすると、老耄の故ではあろうが、つい「過ぎた昔はよい日であった」と懐旧の情が過多となってしまう。

しかし校歌は違う。時を越えて歌う時はいつも今がそしてこれからが一番素晴らしい時なのだと思わせてくれる。

完

アルタール峰

ベースキャンプ

これを書いている、2023年２月の時点で、毎日団地内の公園で仲間とのラジオ体操を終えた後、朝食を食べながらNHK　BS　の田中陽希の「グレートトラバース」を楽しみに見ています。「山は、最高だー」で始まる15分番組。立派なのは、「一筆書き」での日本の山々の登山なので、交通手段を一切使わないでの山登り。道路を100Kmも歩くことがある。

さて、私の山登りは1967年６月の鳳凰三山の新人合宿から始まりました。それまでハイキング程度の山しか知らず、山の会に入って「岩と雪」を知って驚きました。当時の山の会は合宿が中心でした。新人合宿、夏合宿、冬合宿（冬山山行と言ったかな)、春合宿、それに部山行、RCT,　雪上訓練とあった。合宿に参加するためにはトレーニングが必要とされ、部室に掲示版を張って何回トレーニングに参加したかを記録していました。山の素人の私は唯々山の会の計画に沿って100％参加したものでした。思い出の山は沢山あります。今でも街中で花々を見たら初夏の山を、紅葉を見ては秋の涸沢を、そして風の冷たさに冬山を思い出します。

岩登りは、大したことはしませんでしたが「鳥も渡らぬ滝谷」には数回行きオーソドックスなル

ートは登りました。最初はジャンダルム飛騨尾根でした。それから、劔の源次郎尾根、八ツ峰なども楽しみました。なんだかんだで山登りであっという間の学生時代でした。

１．２年はしっかり授業に出て単位は取っておきました。そして３，４年はゼミだけと思って、そのゼミ以外は授業には出ませんでした。しかし、単位は取っても、必須科目というのがあって、商学部では統計学が必須科目でした。統計学は一夜漬けは出来ません。教科書の一部を丸暗記して、試験問題とは全く異なる回答を書き「お願いします」と追記しておきました。成績は零点のはずです。親父にも４年での卒業は無理かも知れないと伝えていました。ところが、なんと「可」で無事卒業できました。安堵感と、なーんだ早稲田ってこんなものかと思ったのも確かでした。

卒業後は大阪入社で神戸に知床縦走を一緒に行った山の会の友がいましたので、誘われて六甲のロックガーデン、２月の富士山（ラッセルばかりで５合目まで)、劔や穂高に良く一緒に登りました。

失敗談、情けない経験は幾つもあります。一番大きいのは大学２年の春山の鹿島の吊り尾根から黒部側への滑落です。アイゼンを引っかけてしまいました。幸いキスリングの制動で途中で止まり先輩の助けで登り返すことが出来ました。但し、翌日は足首の捻挫で歩くことが出来ずに、赤岩尾根を先輩に負んぶして降ろして貰いました。日にちが３月２０日で私を可愛がって呉れた曽祖母の命日でした。アイゼンを引っかけた時に両親の顔が浮かんだのを思い出します。

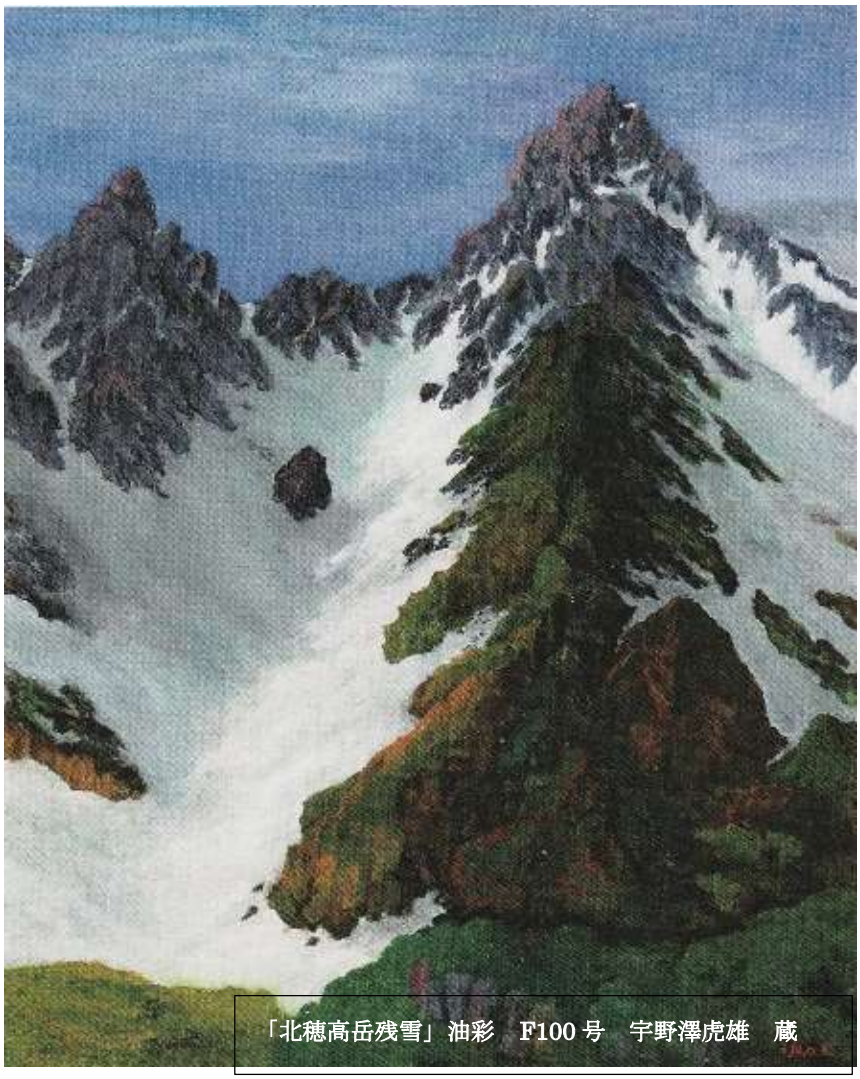
後は、奥多摩の小常木谷の沢登りで新人３人を連れ、リーダーの私が岩から滑落して捻挫で歩けなくなり、二人を帰して、残った新人と二人で当に野宿で一晩過ごしたことがあり、先輩からこっぴどく怒られました。

まー、色々ありましたが今では懐かしい思い出です。今でも月１回は登山靴の紐を締めて日帰りハイキングを楽しんでいます。山は最高です。

冬の北八ヶ岳

⑶栗又功雄の「山岳画」

栗又功雄（S38 年卒）



「北穂高岳残雪」油彩　F100 号　宇野澤虎雄　蔵

プロフィール

1939 年 7 月
浅草に生まれる
1959 年 4 月
早稲田大学建築学科入学・
山の会気象部に入部
1963 年 4 月
大成建設入社
2002 年 7 月
大成建設退社、登山再開
現在：示現会会員
日本山岳画協会会員

当時、登山ブームもあり、100 名以上の新人が入会しました。でも卒業したのは十数名でした。新人の時は大変つらく、何度もやめようと思いました。続けられたのは、素晴らしい先輩やいい仲間との出会いがあったからです。山口昌之先輩は尊敬しあこがれの先輩でした。

仕事についてからはほとんど山に行けず、会社を辞めてから山の会同期の松村啓之亮、吉田稔、白倉俊夫さんたち昔の仲間と山を再開しました。そのころ、油絵の教室に通っていて、モチーフは静物や人物でしたが、山を再開してからは山をモチーフとしました。
「山に登って描く」ことをモットーに、山岳画に取り組んできました。岩と残雪と這い松の緑、その調和が素晴らしい北アルプスの山々をはじめとし、厳しくかっこいい山を求めてスケッチして歩きました。山岳画と風景画の違いについてはこだわってきました。
山岳画は山に登って、描きたい山そのものを描く。

最近は体力も落ち、山に登ることが難しくなりました。何年か前のスケッチをもとに描いています。これからの絵の制作は考えていかなくてはなりません。

「蝶が岳からのスケッチ」

「蝶が岳から穂高を望む」　油彩　F100 号

示現会展に出品しました。

中学生の孫と八方尾根を登り、唐松から五竜を描きました。

「八ヶ岳秋風」油彩　F100 号

台風一過、まだまだ風が収まらず、八ヶ岳硫黄の頂上の小屋の陰でスケッチしました。

北尾根は日中は逆光なので夕方の残照を描きました

山の会創立 60 周年記念で、現役のメンバーと徳澤園に集結しました。翌日蝶ヶ岳に登り、槍から穂高のパノラマに感動し、スケッチブックを広げました。まさに絵はがきの様です。余りにきれいすぎて絵の構図になりません。何処を切り取りるか何枚かスケッチしました。

「槍ヶ岳より穂高を望む」油彩　F50 号

日本山岳画協会は槍ヶ岳肩の小屋と提携し毎年スケッチ教室を開催してきました。
槍の肩から望む穂高は好きな構図です。

「夏山賛歌」油彩　F100 号

「前穂高岳北尾根」油彩　10 号

「甲斐駒ヶ岳」油彩　F100 号

山の会同期の太田謙と仙丈岳に登りました。
現役時代、雪の仙丈で肩を組み、「早稲田の栄光」歌ったことが思い出されます。
小仙丈から描きました。

「杓子と鑓」油彩　F100 号

白馬岳は現役時代、気象部の定点観測をやった思い出多い山です。白馬岳から杓子と白馬鑓を描きました。

「北穂高岳南稜」油彩　F100 号

涸沢カールからの穂高は魅力がいっぱいです。なかでも涸沢ヒュッテから眺める北穂高岳はすごい迫力で迫ってきます。南稜が劇画の拳のように頭上に振りかぶってきます。その迫力をどう表現するか？
まだ実現できません。

「春陽」油彩　F100 号

6 月の涸沢から描きました。緑の空にこだわりました。入院中、頭の中で何回も描きましたが、退院してからキャンバスに向かうと頭の中の絵になりません。今年(2023 年)の示現会展に出品しました。

【特集Ⅲ：2022～23 年雪山等の記録】

(1) 年末八ヶ岳・権現岳登山

斎藤壮呉（Ｍ１年）

① 日　程：2022/12/30

② メンバー：　斎藤壮呉（Ｍ１年）

③ 概　要：天候）快晴・弱風　行動記録）6:00 千露里庵 - 6:50 冬季閉鎖ゲート - 7:05 天女山 - 9:05 前三ツ頭 - 9:45 三ツ頭 - 10:25 権現岳 - 11:05 三ツ頭 - 11:30 前三ツ頭 - 12:52 天女山 - 13:10 冬季閉鎖ゲート - 13:45 千露里庵 登り 4h25min，下り 3h20min（千露里庵発着）

11 月の千露里庵収穫祭にて，年末にも立田さんふくめ数名の方が訪庵すると仰っていたので，同じタイミングで山の会も利用させていただくことに。せっかくならと，権現岳登山を計画。

29 日の早朝に集合し，車にて現地入り。千露里庵自体のメンバーは齋藤，櫛舎，櫛舎の友達の新井，2 年藤原，1 年小原。新井以外は 10 月の山の会合宿，もしくは収穫祭に参加しており，千露里庵はリピーターが多い模様。初日は千露里庵の今井さん(H5 年教育院卒，早大紅峰倶楽部)ご家族とご一緒し，北海道の鹿肉スペアリブでの BBQ やビーフシチューをご馳走いただいた後，凍る水浴び用ホースと格闘しながらサウナを楽しんだ。

30 日は一人早めに起床し，まだ暗い森のなかを出発。千露里庵から冬季閉鎖のゲートまでが案外遠かったが，焦らず少しずつ心拍数を上げていく。ゲート前にはすでに車が複数台並び，登山者が準備をしていた。その横にパトカーが停まっており，なにかあったのかな？と思ったが，通り過ぎて登山道を目指す。

空はすでに明るく，天女山までの道を少し登ると三ツ頭と権現岳が赤く照らされているのが見えた。途中 3 人ほど追い越しながら，よく踏み固められた雪道を軽快に進む。全体的に雪

には覆われているが，そこまで積もってはいない様子だった，トレースを外れても膝下くらい。天気は良く，風もなく，しばらくは手袋もいらないほどあたたかかった。

前三ツ頭までの急登はかなり長く感じた。2000mを超えたあたりから斜面がより急になったため，アイゼンをつけた。前三ツ頭を越えて三ツ頭に着き，権現岳に伸びる稜線にすこし圧倒されながらも，山頂にガスがかかる前に行かねば，と先を急ぐ。三ツ頭からはトレースはあれども雪はそれまでより深く，すこし足を取られながら歩いた。

山頂直下に急斜面のトラバースがあり，一歩一歩確かめながら進んだ。想定よりも 1 時間程度早く登頂，2 年前の夏に来た時とは全く色の違う景色に感動した。

下山は踏み固められた雪にアイゼンがグサグサと刺さり，膝への負担が大きかった。斜面が緩やかになった頃合いを見てすぐにアイゼンを外し，小走りで下山した。ほかの山の会メンバーの離庵と同じタイミングで千露里庵に戻ることができた。みんなを見送った後，自分は夕方まですこし体を休めてから電車で帰京した

⑵　白毛門・笠ヶ岳ピストン縦走

斎藤壮呉（Ｍ１年）

①　日　程：2023/2/12

②　メンバー：斎藤壮呉(Ｍ１年)、小田直輝（４年)、羽山航平(2 年)

③　概　要：天候）快晴・無風 行動記録）6:30 谷川岳ドライブイン － 7:00 白毛門登山口 － 9:10 松ノ木沢ノ頭 － 10:05 白毛門 － 11:00 笠ヶ岳 － 12:00 白毛門 － 12:30 松ノ木沢ノ頭 － 13:30 白毛門登山口 － 13:45 谷川岳ドライブイン登り 4h30min，下り 2h45min(駐車場発着)

小田が卒業を前にどこか登りたいと言ったので，白毛門から一ノ倉の岩と雪を見ないか，と提案。羽山 も加わり，3 人での山行となった。

前日(11 日)の 23 時に所沢に集合した。いつも通りのニコニコレンタカーだが，スタットレスを装備するせいでいつもより高かった。上里 SA で軽く夜ご飯を食べた後，2 時前に谷川岳ドライブインに到着し車中泊。僕はその日高校の部活の同期達と一日遊んでいたおかげで一瞬で寝落ち，朝までぐっすりだった，寝袋を持参していたのもよかったと思う。小田はその日の朝に名古屋旅行から帰って，昼間に爆睡していたせいで，しばらく寝付けなかったとのこと。深夜，僕が寝ている間に羽山と小田でエンジンを付ける消すで静かな争いがあったらしい。帰り道にその話を聞いて，ちょっとおもしろかった。

朝は計画通り 5:45 に起床，準備をして 6:30 前に出発。天気は快晴で，白毛門の山頂を朝日が照らすの が見えた。登山口からこんもり雪が積もっており，すぐに急登がはじまることが分かっていたためアイゼンを付けた。自分らのほかには 5 人程度の団体と単独行が二人程。二日前には関東でも積雪があったほどだったが，前日は晴れて登山者がいた様で朝の時点ですでにばっちりトレースがあり，一日を通してワカンは使用しなかった。朝の締まった雪にアイゼンの刃を効かせながら急登をあがっていく。

登り始めてすぐにジャケットを脱いだ。最初はストックで登っていたが，斜面が急でピッケルの方が使いやすいと思い持ち替えた。快適だったのは最初だけで，暖かさから次第に雪が緩み数歩進むとアイゼンに 団子ができるような状態で，ピッケルでいちいちたたき落としながら登った。順調に単調に歩みを進め，10 時に白毛門に登頂。物足りなかったので，羽山の提案でより景色を見渡すことができる笠ヶ岳まで 足をのばすことにした。白毛門から笠ヶ岳まではそれまでよりも雪が踏まれておらず思ったよりも難儀し，途中で小田は白毛門に引き返した。羽山と二人で長い急坂を登り，笠ヶ岳に登頂。山頂からは谷川から続く稜線がすべて見渡せ，遠くに夏に登った巻機山も見えた。羽山は秋に谷川から白毛門まで縦走しており，その時との景色の違いを楽しんでいるようだった。ぼくはあまり山頂に滞在するタイプではないが，羽山はしばらくの間写真を撮り，双眼鏡で遠くを眺めるなどしていた。彼のような楽しみ方もいい なぁと思った。

雪道の下りは四阿山のときもそうだったが，無口になる。腐った雪の斜面に神経を集中しているからだ ろうか。いまいちやわらかい雪の下りは慣れない。登りよりも下りのほうが気をつかう。途中，目視では 確認できなかったが，谷川のほうから雪崩のような音が聞こえた。長い急な尾根を休むことなく下り，白 毛門からは 90 分で登山口までおりた。 今回は上里 SA で豚骨ラーメンは食べず，小田が卒業ということで，少し豪華にスシでしめた

⑶　上州武尊山

羽山航平（２年）

①　日　程：2023/2/17

②　メンバー：羽山航平(2 年)、木村英亮(2 年)

③　　概　要：羽山です。今日登っていた上州武尊山ですが、無事、下山しました。
今日は晴天に恵まれ、上越のほぼ全ての峰々が見渡せました！
　百名山で人気の山なためか白毛門よりはトレースがしっかりしており歩きやすかったです。せっかくなので、写真を送付します。山頂から剣ヶ峰を眺めたところになります。計画書のご確認など、ありがとうございました。

⑷　北八ヶ岳天狗岳

羽山航平（２年）

①　日　程：2023/3/4～5

②　メンバー：CL 木村亮英(2 年)、SL 羽山航平(2 年)、海崎真穂(4 年)、 櫛舎裕太(3 年)

③ 概 要：

3/4～3/5 で雪山登山をしようという話があり、かねてから予定を開けていた。木村が天狗岳はどうかと提案してくれ、ちょうど去年悪天候で行けなかったのでいい機会だと思い、参加した。また、私は一度秋に八ヶ岳縦走で訪れており、天狗岳の急登に苦しめられたので、因縁の山へのリベンジとなった。天気は 1 日目は快晴、2 日目も晴れときどきガスといった感じで、快適な雪山登山となった。

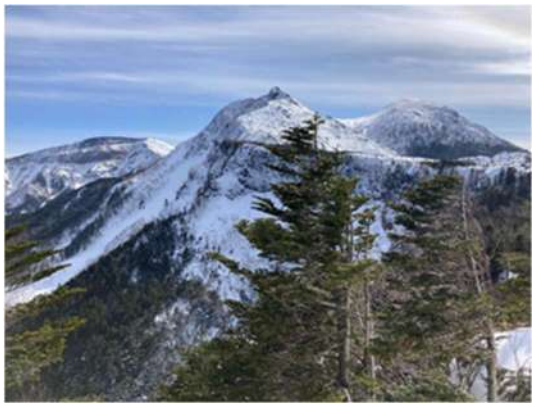
今回の山行も、晴れてしまった。今のところ、私が行った今年の雪山(九重連山、三つ峠、上州武尊、白毛門)は全て晴れだった。晴れることは悪くないのだが、経験として、ホワイトアウトや降雪状態での雪山を登ってみたかったため、晴天ながら少し残念だった。最初から最後まで難所はなく、初めての一泊二日での雪山登山を快適に終えることができた。

今回よかった点は、天気のおかげもあり、チャレンジングな登山ができた点だ。元々にゅうは行く予定ではなかったが、時間があったので挑戦できた。挑戦に見合う、よい景色を眺めることができた。また私は以前から雪洞泊に興味があった。テント場の横に、実際に作ってみたところ、頑張れば大人一人入れそうな雪洞ができた。小学生が遊びで作ったようなレベルのお粗末なもので、顔正面には雪面があるなど快適とはとても言い難かったが、寝ることはできた。当然、寒さと狭さで夜中に何度も目覚め、朝 5:00 のスマホのアラームがなったときには、極限環境を生き延びた！！、という謎の達成感があった。

今回行って初めて分かったのは、泊りがけの雪山はかなり体力が必要だということだ。テント泊の重い荷物を背負った状態で、アイゼン歩行するのは、体感普段の 1.5 倍体力を使うような感覚だった。いい勉強になった。

反省点としては、バスの時間の間違いが挙げられる。先輩に電話いただいたのと、増便のおかげでなんとか間に合ったが、危なかった。自分の企画でないため、少し他人まかせになっていたことが原因と思われる。今後は全て自分事として、間違いなく計画を把握しておくようにしたい。

初めての一泊二日の雪山としては、これ以上ないものとなった。車を運転してくださった先輩方、山行を企画してくれた木村くん、ありがとうございました！！



⑸　その他

①日光・雲龍渓谷

①　日　程：2023/２/6～8
②　メンバー：羽山航平（２年）他８人
③　概　要：雲龍渓谷の氷瀑見物
　　その後戦場ヶ原でスノーハイク

②丹沢縦走

①　日　程：2023/2/15
②　メンバー：羽山航平（２年）、藤原隆仁
　　(2 年)、松山拓夢、谷口至良（１年）
③　概　要：冬の丹沢主脈縦走
　　東野～蛭ケ岳～丹沢山～塔ノ岳～大倉

③赤城山

①　日　程：2022/6/18～19
②　メンバー：井上陽太(1 年)、羽山航平
　　(2 年)、深山英郎(1 年)
③　概　要：雪山入門、大沼を見る。
黒檜山登山口～駒ヶ岳～駒ヶ岳登山口

④フリークライミング

湯河原幕岩 RCT(2023/2/23)海崎・木村

城ケ崎しりいだし RCT(2023/4/9)櫛舎・木村

人間関係を築くための基本原則の学びその2

～考え方と実践のコツ - 幸運を招く素敵な人生を築こう～

廣瀬舜一（S38 年卒）

3：幸運を呼び込む心の姿勢を自分のものにする

＝応援団の増える人間関係を築く

3 - 1　人間は一人で生きているのではない＝

自然・社会・周りの人々に生かされていることに気づくことが

→ 素適な人間関係作りのスタートとなる

手元にあるどんな商品でも作られて手元に届くまでには 200 万人もの人手がかかっているという厳然たる事実-ありがとうという感謝の気持ちが持てる人間になることが好運を掴むきっかけとなる

㋑それには誰でも出来る内観の実践でまず感謝の心を習慣(血肉化する)にしてしまう

→ 更に利他の心へ高める⇒人に喜んでもらうことをする＝人格の成長

内観のやり方

ⓐ両親を対象に「してもらったこと」「迷惑をかけたこと」「してあげたこと」を

ⓑ１時間瞑目して考え浮かんだことを書き出すと

Ⓒ前者ばかりで「してあげたこと」は極めて少ないことにオドロキ

→ 心が浄化される＝本物の感謝心が湧き自分の未熟さに気付き目覚める

㋺感謝感謝とお陰様で生きる＝人格を磨く、成長する

一流の人物ほど身近な人にまで - ご両親、夫婦間、知り合い、仲間、部下、上司

→「ありがとう」の連発をしている事例は事欠きません

㋩努力が実る土俵づくりに全力を

ⓐ“おれが､おれが”のがを捨てて、“おかげ､おかげ”のげで生きる

ⓑ“受けた恩は石に刻み、与えたことは水に流せ” - 日本の故事

Ⓒ日本ほど弱者にやさしい国は世界中にありません

感謝心を持っている事で宇宙の無限の創造力を持つパワー(神)と自己の魂との波長が合い

→ 魂に火が付く
- 気付き・ヒラメキ・アイデアが生まれる
- 周りから見ると - あの人は運が良いとなる

３－２　心の持ち方や考え方を豊かにする

ⓐ人生は日々の仕事や暮らしの中で自分の応援団作りの競争でもあります
最大の応援団はお客様と仲間達、そして夫婦や家庭や両親です
ⓑ人格と人柄を＝感謝と利他の心の土壌創りからスタート
Ⓒ当たり前のことに「ありがとうの声掛けで」差を掛ける習慣付け

㋑自分だけ良ければよいというガン細胞を自分の心から取り出せ

㋺**感謝**の気持ちと**利他心**で仲間達うや自分の回りの人たちを大切にする
ⓐ応援団にする＝「情けは人の為ならず」＝必ず自分に返ってくるという意味
ⓑ日本の伝統的精神　＝　支え合い、助け合う＝大和の心
Ⓒ気くばり、思いやり、親切心のできる気付力を磨け＝有意注意の生活を送る

㋩リーダーシップを磨き、常に明るく前向きなチームワークを作り上げる
→ リーダーシップは与えられた職務毎に発生します
必ずしも上司や店長・リーダーとは限りません

３－３　逆境や障害も感謝と試練として前向きに受け止めて

㋑　ⓐ積極的に今出来ることに全力投球することが
→ **逆境を好運のスタートに切り換え**運を呼び込む秘訣でもある
→ 「他人が助けたくなるほどの努力をしているか」松下幸之助
ⓑ結果が良い時は　－ダカラ良かった
〃　悪い時でも－ダカラ良くなる　］と　常に明るく前向きに受け止め続けることで
→ 潜在意識に根付いているマイナス意識が浄化し運を呼び込む

㋺**ボヤキは厳禁**＝何も生み出さない－逆境や障害を試練と受け止めることでのみ
→ 前向きに考え乗り切る力－アイデア（方策）が湧いてくるもの
ⓐ㊀思考をふりきるキッカケとなる－（**勇気と元気**）も生まれる
→ ⓑ今までと違う角度で見ることができる＝観の転換が生まれ**創造性**を育む
Ⓒ一段上の次元で観る＝（全体的・立体的に相手の立場）で観ることで
→ 相手の協力を得やすい良い解決策を見つけ易くなる

㋩自分さえよければの**利己心を捨て**、利他心－相手やお客にとって良いことや
求められていることは何かの観点より考える
利他・気付き・学びを深くつきつめ、実践に落し込むことで
ヒラメキ・アイデアが湧いてくる能力＆チャンスを掴める

【COLUMN２】

日本岳人列伝その７：槇　有恒

金子治雄（Ｓ41 年卒）

著作、旺文社文庫「山行」　昭和４２年初版、

岳人槇有恒についてその存在を考えて見ると、真っ先に頭に浮かぶのは、槇がマネージメント力に異常に長けた岳人であったことに気が付きます。

改めて槇が標した代表的な足跡を辿ってみると、我が国で初めて学生組織としてのアルピニズムを志向した慶応大学山岳会を創設し、豪雪地帯の我が国で、個人では困難な積雪期登山を団体で行う形をつくり、カナダロッキー山脈の未踏峰アルバータ遠征で、我が国初の組織登山の海外遠征モデルをつくりました。そして第１次、第２次と成功しなかったヒマラヤ、マナスル登頂の、第３次登山隊長を務め、国家的事業であったマナスル初登頂を成功させたのです。

この昭和３１年（１９５６）のマナスル初登頂は、当時小学６年生の私にさえ、大きなインパクトを与えるほどの国家的にニュースとなり、国民の間は大きな喜びに包まれました。戦後復興が一段落し、次の目標を求めていた人々に、マナスル初登頂と南極観測は、戦争に寄らずして世界中に大きなインパクトを与え、日本人としての誇りをもたらす大きな出来事になりました。

マナスル登山隊が数少ない８０００ｍに３度の挑戦の結果登頂したこと、米、英、ソ連の大国に伍して国際地球観測年に参加し、白瀬大尉以来の南極大陸遠征を、戦前の老朽砕氷船宗谷で行い大陸に越冬する壮挙でした。南極越冬隊長は京都大学学士山岳会の登山家西堀栄三郎でしたが、登山が国家、国民の喜びになる稀有な時代の頂点に、槇有恒は存在したのです。

マナスル初登頂の３年前の１９５３年、エリザベス２世女王の戴冠式にエベレスト初登頂が発表され、世界中が興奮しましたが、マナスル初登頂はそれを上回る興奮を私たちにもたらし、記録映画ができると学校全体で見に行きました。その結果子供心にマナスル登山隊長槇有恒の名は、深く心に刻まれたのです。

現在、全く当たり前のごとく実践していますが、近代登山には２つの形態があり、１つは目的を同一にした組織による組織的登山、もう１つは個人の志向や目的を実践する個人登山です。私たち山の会も個人山行もありますが、基本的には山の会という組織によって決められた組織的登山を実践しています。

この組織的登山の形態を我が国で初めて確立したのが、槇有恒が創設した慶応大学山岳会でした。槇有恒が組織した慶応山岳会は、学生の間に登山への気分が高まりつつある中で創建され、大正年間それに前後して、登山グレードの差はあるものの旧制高校に一高旅行部、三高山岳会、二高山岳会が誕生し、更に慶応山岳会の刺激を受けた北海道帝大スキー部、学習院大学山岳部、早稲田大学山岳部が誕生し積雪期登山など、上昇志向の強い登山活動が行われました。

我が国に積雪期登山の気分が興隆したのは、明治４４年にオーストリア・ハンガリー帝国のレルヒ少佐によってスキー術が高田や旭川の連隊に伝えられ、それがまたたくまに一般人にも広がり、短期間に多くの人たちがスキーを実践しました。レルヒ少佐のスキー術は、平原のスキー術でなく、山岳地帯の氷河を行きかう山岳兵のスキー術であったため、その後の積雪期登山が発展する大きな技術的な背景になったのです。余談になりますが八甲田行軍で青森連隊の１個中隊が全滅した

ことは、スェーデン、オーストリア・ハンガリー帝国、プロイセン帝国の陸軍に深刻な影響を与えました。オーストリア・ハンガリー帝国陸軍は、遭難の原因調査と、日露戦争でロシア陸軍を破った要因調査にレルヒ少佐を派遣したので、日本にスキーを指導に来たわけではありません。レルヒ少佐は１台のスキーを持参してきましたが、高田連隊長はすぐさまコピーを作らせ、将校や兵にスキー術を学ばせました。レルヒが伝えた山岳スキー術によって、初期探検時代の登山と全く異なり、従来無雪期しか登れなかった北アルプスの積雪期登山が可能になり、スキー術と縁のないガイドによる登山から、スキー術を学んだ組織員同士の登山へと、登山形態が変わる兆しが生まれたのです。

こうした機運が生じる最中、槇有恒は慶応大学を卒業し、コロンビア大学に留学しましたが、まもなく勉学をやめて英国に渡り、英国各地で遊んだ後、ウェストンを訪ねました。ウェストンからスイスのグリンデルワルト滞在を薦められ、２年間、ドイツ語を学びながら夏にはガイドたちと様々な山を登り、本格的なアルプスの登攀技術を学びました。

そうして大正１０年９月、待望のアイガー北東山稜（ミッテルレギ山稜）の初登攀に成功したのです。この登攀は世界の登山史に残る快挙でした。

アイガーは１８５５年初登頂され、その後１８７１年南西稜、１８７６年南尾根が登られてから４５年の半世紀近く、英国、ドイツ、オーストリア、スイスの４か国の登山家たちの１２回の挑戦を退けていました。

槇は北東山稜（東山稜）に長さ６ｍの丸太を用意し、上端にＳ字形の鉤をつけ、下端には３本の石突きを作り、その１本は根元を輪にして自由に回るようにしました。こうした金属の仕掛けや３０本のピトンはピッケルづくりの名人シェンクに作成を依頼したのです。登攀メンバーはガイド３人と槇の４人で、丸２日かけて登頂成功後、村人たちの歓迎は物凄く花火が上がり広場は人でうずまりました。槇は登頂への感謝と後続の登山者のために、村に１万スイスフランを寄贈しミッテルレギ小屋を建築したのです。

この大正１０年暮、槇が帰国し、彼が会得した本場の技術や持参した最新の登山用具から、我が国の本格的なアルピニズムは始まったのです。

既に慶大山岳部の中堅であった大島亮吉は自身の著書でこの時の気持ちを語っています。

「槇さんが帰ってこられた時は嬉しかった。僕たちはその言葉の１つ１つが胸に響いた。ことにその帰ったばかりの時の僕たちの山岳会だけの歓迎会の時は全く嬉しかった。その時まで本で読んでいたアルプスのことや、本で分からないもっと実際的なことが良く判った。」

槇の帰国によって慶大山岳部、学習院山岳部、遅れて早大山岳部の積雪期北アルプスの活動が、いっそう活発になり大学山岳部による本格的なアルピニズムが勃興しました。

槇有恒の著書「山行」の白眉は「アイガー東山稜の初登攀記」と「板倉勝宜君の死」の２編です。著作「山行」は高校時代学校の図書室で借りて読みましたが、「板倉勝宜君の死」は私にとって初めて読む遭難記であり、当時連日大ニュースとなっていた東大山岳部の滝谷遭難と共に、山では元気に登っていた人間に、あっけなく死は訪れるものだと初めて知りました。この遭難事故は当時慶大山岳部内にも大きな影響を与え、大島亮吉の「涸沢の岩小屋のある夜の事」でも触れられています。

槇有恒自身については山以外著作では触れていません。しかし防衛大学の初代校長は槇の兄の智雄であったことは、子供の頃から軍事オタクの私は知っていました。智雄は慶大塾長の小泉信三と懇意の経済学者であり、吉田茂の推薦で、戦前の近視眼的だった帝国軍人の反省から、リベラルアーツを教えるために校長に就任しました。兄智雄は英国留学時、槇とアルプスを共に登攀したことも記録にあります。

６０歳を過ぎてから改めて「山行」を通しでじっくり読んでいたら、「アルプスの山村と人の四季」の素晴らしい文章に出会いました。槇は短い表現でアルプスの山村の四季について的確に語っており、詩的でとても味わい深い内容で、素人ながら一流の書き手であることを知りました。更にアルプスの峰の「登高記」にはマッターホルンの麓で、あのギドレイがウインパーと出会った有名な記述がありました。この記述には、若き時にこれを読んだアルピニストは年老いたらこうありたいという、アルピニストの理想像が描かれています。多分槇はこのことを実践したに違いありません。

次回　第８回　武田久吉

【お知らせ】

(1) 栗又功雄 OB(S38 年卒)の示現展

① 日時：4 月 5 日～4 月 17 日

② 場所：国立新美術館

③ 内容：第 76 回示現会展

4 月 9 日に、久しぶりに西麻布の新国立美術館に出かけて、第 76 回示現会展をを鑑賞した。絵画が中心の美術展で、栗又先輩の北穂高岳の空がグリーンの挑戦的な作品。当日はルーブル美術展もやっていて大賑わいだった。

(2) 吉田　稔 OB(S38 年卒)の創造美術展

① 日時：5 月 20 日～5 月 27 日

② 場所：東京都立美術館

③ 内容：第 76 回創造美術展

創造美術展が洋画、日本画、彫刻、陶芸等までの総合美術の公募展で、上野の東京都美術館の２階の全フロアを占有していた。その日は雨だった。吉田先輩の作品は陶芸部門の「藤香る夕べ」で、水面から浮き出てくるような蒼い色の紋様が素晴らしい大型の花瓶。ＦＭアロー賞受賞。

吉田先輩の登山靴をモチーフにした作品もあった。

（3）訃報

久富征夫 OB(S43 年卒)が令和 5 年 3 月 4 日に永眠されたと、連絡がございました。

久富 OB は 1966 年早稲田大学で合同で派遣されたアフリカ縦断登山隊のメンバーでもあります。故人ご冥福を謹んでお祈りいたします。

【編 集 後 記】

稲山会通信第 47 号の特集Ⅰは、「2023 稲門山の会総会」です。

2023 年総会・新年会の写真には 40 人以上のたくさんの懐かしい会員の顔が映っています。また、12 人もの現役学生の顔も映っています。お楽しみください。

次に特集Ⅱは、「山のちょっと良い話」。トップは松村ＯＢ(38 年卒)の「愛国行進曲・校歌を叱られる」。忘れられないアンデス遠征の歌が愛国であり校歌であったというのは、戦後ど真ん中に生きた青春記ですね。因みに私の夏合宿で忘れられない歌は「ひと夏の経験」です。

大きな昭和登山ファッション姿で登場したのが新井ＯＢ(S46 年卒)の「山は最高だ！！」情けない、失敗した山ほど思い出に残る登山はないというのは、まったく同感です。

ラストは栗又ＯＢ(S38 年卒)が 20 年以上描いてきた山岳画の集大成。山の会には栗又ＯＢや吉田稔ＯＢ(S38 年卒)のように登山だけでなく芸術に秀でた人材がいるのは全くの驚きです。

次に特集Ⅲは、「2023 年冬山の記録」　今年の冬は現役学生らが精力的に冬山やフリークライミングに出かけました。12 月には斉藤壮悟君(Ｍ１)が単独で八ヶ岳の権現岳を登り、2 月には谷川岳対面の白毛門山～笠ヶ岳、同じく 2 月に上州武尊山、3 月には北八ヶ岳天狗岳縦走と毎月のように冬山に向かいました。これは、コロナ禍においてもひとつひとつ登山技術を身に着けていった上級生と、元気な若手が育ってきた相乗効果と思われます。

コラム１では廣瀬ＯＢ(S38 年卒)の「人間関係を築くための基本原則その２」は、就職活動や社会人になる上級生の皆さんにはとても参考になると思います。山の会は登山を楽しむだけでなく、人間性を磨く場でもあるのです。コラム２は金子ＯＢ(S40 年卒)の「日本岳人列伝」は慶応大学山岳部の祖、槇有恒です。彼が日本の登山界にアルピニズム（困難性を追求する近代登山）を持ち込んだ経緯が生き生きと描かれています。

また、何度かオンライン INFO で配信しましたが、2023 年度から会長不在となったため、暫定的に学生生活課の職員が一年間山の会の会長を兼務して頂いております。今年度中に次の会長が見つけないと「大学の公認サークル」の資格を失い、従来のサークル活動が出来なくなるため、次の会長になって下さる方を探しております。お知合いに早稲田大学の教授、准教授、職員等で山好きの方がいらしたらご連絡ください。

さて、最後に 8 月 26 日(土)に稲門山の会の暑い気払いを早稲田の完之荘で開催します。まだ間に合います。岳人の資質で一番で大切なのはなんといっても人情です。暑気払いなどで応援してくれることが一番身に染みてありがたいので、是非追加の参加をよろしくお願いします。

fuki.yoneyama@thingsip.com **米山不器**

yukuemnamekata@gmail,com **行方正幸**

次回の特集は「沢登り」です。自薦他薦の投稿お待ちしています。行方正幸(S50 年卒)記